



— 私のまちの — 福祉活動カタログ

vol.15

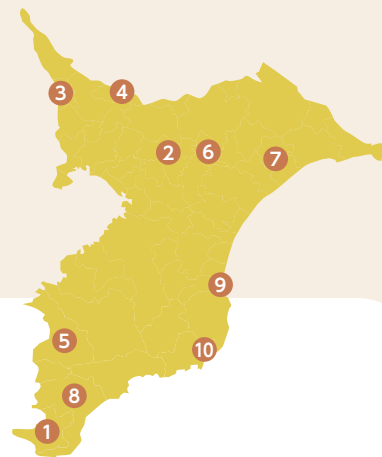


ふれあいネットワーク



社会福祉
法人

千葉県社会福祉協議会



発行にあたって

「私のまちの福祉活動カタログ」は、本会が千葉県における地域づくりを推進することを目的に、平成12年度から継続して発行している小地域福祉活動の紹介を中心とした活動事例集です。

第1号の発刊から20年以上の歳月が経ちますが、この間、社会は変化し続けており、少子高齢化は着実に進行しています。個人のライフスタイルや家族の姿も多様化し、社会情勢や雇用環境などの変化も相まって、地域では単身世帯が増加しています。

また、令和2年に流行が始まった新型コロナウイルスの感染拡大により、これまでの生活様式は一変し、人との接触を避けるためのソーシャルディスタンスの確保や外出の自粛が求められるなど地域において孤立してしまう人が急増しました。

小地域福祉活動においてもその影響は大きく、地区社会福祉協議会（以下、地区社協）を中心に展開されてきた多くの活動が中止や縮小を余儀なくされ、これまで地区社協が何よりも大切にしてきた「人と人とのつながり」をつくる様々な活動や機会は奪われました。

そうした一方で、コロナ禍の厳しい状況の中にあっても、これまでのつながりを途絶えさせないための様々な取り組みや工夫が各地で行われてきました。

第15版となる本カタログではコロナ禍における県内10地区の活動事例を紹介しています。また、それぞれの市町村社会福祉協議会（以下、市町村社協）の重点事業についても併せて取材し掲載しています。それぞれの市町村で地域特性を踏まえた多様な取り組みが行われており、市町村を超えて情報を共有し、互いに学び合える素地ができたものと考えます。

誰もが住み慣れた地域でその人らしく暮らしていくためには、「自助」、「公助」に加え、地域に暮らす住民同士が支え合う「共助」の取り組みがますます重要になっています。そうした取り組みは国が進める、地域住民や地域の多様な主体が参画し、人と人、人と資源が世代や分野を超えてつながることで、住民一人ひとりの暮らしと生きがい、地域をともに創っていく「地域共生社会」の実現にもつながるものと言えます。

結びに、本カタログの発行に際し、快く取材にご協力くださいました各地区社協の皆様をはじめ、各市町村社協、その他活動団体の皆様に対し心よりお礼を申し上げます。本カタログが千葉県の地域福祉の推進の一助になることを願うとともに、地域福祉に関わるすべての皆様のさらなる活動の充実に向けた応援のメッセージになれば幸いです。

令和5年3月

社会福祉法人千葉県社会福祉協議会



INDEX

- ① **館山市・富崎地区社会福祉協議会** 2
地区社協と社会福祉法人が連携した買い物支援の取り組み
- ② **佐倉市・西志津地区社会福祉協議会** 4
祖父母・子・孫の三世代の交流を育む「西志津敬老ふれあいフェスタ」
- ③ **流山市・新川北部地区社会福祉協議会** 6
流山市発!地区社協が運営する こども食堂「みんなの食堂【あつまれ 西深井の森】」
- ④ **我孫子市・天王台地区社会福祉協議会** 8
つながりを絶やさず、地域でささえあう
- ⑤ **富津市・竹岡地区社会福祉協議会** 10
地域をあげた避難訓練で自助・共助の意識を醸成
- ⑥ **富里市・浩養地区社会福祉協議会** 12
安心して戻れる場所でありたい!高齢世代から学生や子育て世代の声をくみ取る地域福祉フォーラム「こうよう座談会」の取り組み
- ⑦ **匝瑳市・椿海地区社会福祉協議会** 14
地域の課題を話し合い実現を目指す「支え合い助け合い会議」の取り組み
- ⑧ **南房総市・三芳地区社会福祉協議会** 16
地域の生活課題やニーズの解決に向けた協議体「よりどころみよし」の取り組み
- ⑨ **一宮町・北部地区社会福祉協議会** 18
コロナ禍でも工夫してサロン活動を継続
- ⑩ **御宿町社会福祉協議会** 20
地域の誰もが自由に使える常設の交流拠点「交流サロンかぐや」

〈掲載に当たって〉

掲載している記事の役職等はいずれも取材当時のものをそのまま掲載しています。

地区社協と社会福祉法人が連携した 買い物支援の取り組み

過疎化の影響等で地元商店の廃業や撤退が進み、高齢化も相まって、食料品や日用品などの買い物が困難になっている方が増えています。館山市の富崎地区社会福祉協議会では、こうした買い物弱者の課題解消に向けて、市内の社会福祉法人と連携した買い物支援や見守り活動に取り組んでいます。

■ 館山市富崎地区の概要

館山市富崎地区は、房総半島南端の海沿いに位置し、明治時代にはマグロの延縄漁で盛えた景勝地です。令和4年12月1日現在で、地区の人口は717人で、高齢化率は62.9%となっています。

高齢の単身や夫婦のみの世帯が多く、地区内は起伏があるため坂道も多く、車を持たない高齢者が大型スーパーまで歩いていくことは困難です。ネット通販もハードルが高く、バスやタクシーも利用しやすい環境ではありません。

こうした状況に直面した富崎地区社協では、地域の高齢者のための買い物支援の方策を検討してきました。

■ 青空の下、出張販売で 買い物を満喫

よく晴れた晩秋の午前、布良漁港付近に地域の高齢者が続々と集まってきま



す。およそ20名ほどが、地元野菜やお惣菜、日用品を満載した移動販売車の到着を待っているのです。販売車である軽トラックが着いたとたんに荷台のまわりに人が集まり、「今日はコロッケある?」「この前の煮物美味しかったよ!」と賑やかにお目当ての品を探し始めます。開始から15分もすると商品はほぼ完売。買い物を済ませたみなさんはすぐには帰らず、あちこちでおしゃべりに花が咲き始めます。

この出張販売が始まったのは2年前。富崎地区社協のメンバーに届いた地域住民からの「買い物に困っている」という声がきっかけでした。その声に応えるべく地区社協支部長の小谷信雄さんを中心に、地元の向区長である豊崎悦朗さんや包括支援センター、館山市社協と相談。そして知的障がい者などの福祉施設をはじめ、富崎地区で農産物等を販売する「ふれあいショップ平砂浦」なども運営する社会福祉法人安房広域福祉会との連携による出張販売が始まったのです。

■ 社会福祉法人として、 地域からのリクエストに 細やかに対応

出張販売は毎月第2、第4木曜日。毎回利用しているという方は「欲しいものを



富崎地区 向区長 豊崎 悦朗さん

伝えておくと、次回持ってきてくれるのでとても助かっています」と嬉しそう。また、「1人で食べ切れるサイズにしてくれるからちょうどいいのよ」と大好評です。

出張販売を担当するのは、法人の統括施設長である岡田義之さんと中里ワークホーム施設長の近藤大介さん。「リクエストに応じていたら、どんどん品数が増えてきました」と、満面の笑みで応じます。

買い物袋が重くなる帰り道、ここでは地区社協の役員がお手伝い。高齢者を自宅まで送っていきます。また、雨天で屋外販売ができない日には、施設の車で店舗まで送迎もしてくれます。

「市社協を通じて出張販売の話があった時、それはぜひやろうと決断しました。地域のみなさんにはいつもお世話になっていますので、今は移動販売を行っていますが、これからも社会福祉法人と



ふれあいショップ平砂浦

して地域で困っていることには積極的に協力していきたいですね」と岡田さんは熱く語ります。

人との交流が笑顔とつながりを生む

出張販売のメリットは便利さだけではありません。毎月2回、決まった時間に集まって顔を合わせることで、高齢者の外出機会を増やしています。会えばもちろん話に花が咲き、そこそこで笑い声があがります。コロナ禍でどうしても家にこもりがちになり、見守り活動も制限されるなか、懸念されるのは高齢者の孤立化です。



富崎地区社会福祉協議会 支部長 小谷信雄さん

出張販売が始まってから「あの人今日来ないね。どうしたんだろう?」「ひざが痛いと言っていたから、少し多めに買ってお裾分けしてくるよ」そんな会話が生まれるようになりました。

地区社協副会長の小谷登志江さんは「私はいつもみなさんに、うちの中にいないで外に出て人と話をしなきゃ、と言っているんです」と話します。高齢者のみなさんにとって、潮風吹く青空の下で買い物とおしゃべりに興じるひとときが、コロナ禍でのリフレッシュタイムになっています。

コロナ後を見据えて

コロナ以前、地域ではスポーツ大会や演芸大会、お祭りなど大人数のイベントが開催されていました。現在は年に1回の友愛活動とボランティアのみなさんとの交流会を継続しています。また、サロン活動としては、少人数のグループ毎に週に1回から月に1回、民謡や体操、ウォーキング、ボッチャなどを楽しんでいます。



富崎地区社会福祉協議会 副会長 小谷 登志江さん

「いずれ人数制限などが撤廃されれば、もっといろいろなことができるようになるでしょう。その時は1人でも多くの方に参加してもらいたいですね」と小谷さん。豊崎さんも「とにかく元気でいられることが一番。長寿はもちろんですが、健康寿命を伸ばせるよう、できるところから取り組んでいきたいです」と話します。

地区社協のメンバーは、地域の高齢者のみなさんが心配なく集い、交流を楽しめる日がくることを心待ちにしながら、次なる活動に向けて構想を練っています。



館山市社会福祉協議会 TEL 0470-23-5068

誰もが住みやすい地域を目指して

すべての人々が、家庭・地域の中で支え合い、人種・年齢・身体的条件などに関わりなく、生きたいところで生活し、やりたい仕事や社会参加が出来るような機会が平等に与えられる。そんな理想を目指して地域づくり活動に取り組んでいます。(これは理想です。)

館山市社協では、館山市との間で生活支援体制整備事業と包括的相談支援事業を連携事業として位置づけ、地域づくり活動に取り組んでいます。地域の課題は、高齢者だけの問題ではなく、その地域に暮らすすべての方が、地域の課題によってヴァルネラブル(社会的に不利な立場)な状態に陥る可能性があると考えています。お互いにできることで無理なく支えあえる地域づくりを目指して、包括的相談支援事業と連携し、ワークショップや講習会、他世代参加の場「つながりはじめ」等を実施しています。

この「つながりはじめ」では、終活や地域での仲間づくりを考え、エンディングノート作成や発達障害の講習会なども実施しています。そのようなつながりの中で住民活動が生まれようとしています。例えば、こども食堂や、身寄りのない方のつながりなどです。そのような

住民の方が地域で実施したいことを社会福祉協議会として支え、一緒に考えることが重要と考えます。

令和元年度から、台風災害・コロナと地域活動が制限されてきた中で、つながりの希薄化や事業実施の課題も多くありましたが、少しずつでも、無理なくつながり、支えあえる地域を目指し、取り組みを続けていきます。



館山市社協のみなさん

(令和4年11月取材)

祖父母・子・孫の三世代の交流を育む 「西志津敬老ふれあいフェスタ」

西志津地区社会福祉協議会が主催する「西志津敬老ふれあいフェスタ(以下、フェスタ)」は、三世代交流事業として地域のあらゆる世代が参加する、活気あふれる西志津地区の秋の風物詩となっています。コロナ禍でも見守り活動などを継続し、世代を超えた交流事業を積極的に展開する西志津地区社協の取り組みを紹介します。

西志津地区の概況

西志津地区は佐倉市の西部に位置し、令和4年9月末現在の人口は22,732人、高齢化率は29.1%となっています。市全体の高齢化率33.1%と比較して高齢化率は低く、閑静な住宅街が広がるこの地区には若い世代の住民も多く暮らしています。

地区を挙げての 一大イベント「西志津 敬老ふれあいフェスタ」

「三世代交流」は、西志津地区社協が代々掲げてきた活動のスローガンであり、平成18年度まで別々に開催していた敬老会と福祉まつりを、三世代が交流できることを狙いに一体化させ、以降はフェスタとして開催をしてきた経緯があります。

フェスタは、敬老会の式典や模擬店、抽選会のほか、地域で文化活動を行う方の発表の場となり、中学生もボランティアとして運営に参加するなど、多世代の方が関わることで、毎年約3,000人が集まる一大イベントとなりました。



フェスタ当日の様子

コロナ禍だからこそ 見守りの強化を

コロナ禍に見舞われた令和2年度、残念ながらフェスタは中止。また、三密回避や外出の自粛要請に伴い、支え合い活動の一環として行っていた「ふれあいサービス絆」(ゴミ出しや草取りなどの有償サービス)をはじめ、サロン活動、歌声喫茶、落語会など通常の地区社協事業も休止せざるを得ない状況となってしまいました。

こうした時、地区社協のメンバーから「対面での会話や触れ合いを極力控えなければならない状況は高齢者を更に孤立させる危険性がある」との声が上がり、検討を重ねた結果、「令和2年6月からはふれあいサービス絆を再開し、他に何かできることはないかとみんなで考

え、見守りも兼ねた戸別訪問を実施することにしました」と地区社協会長の伊藤泰彦さんは言います。

訪問対象は75歳以上の高齢者とし、訪問時には毎年のフェスタにおける敬老会の式典で渡している記念品も配布。小中学生からの「いつもありがとう」といった感謝のメッセージも添えられ、コロナ禍でも世代間のつながりを大切にしました。戸別訪問数は2,200以上にも上りましたが、民生委員や自治会役員と連携し、一軒一軒訪問して直接やりとりをすることで実情を把握することができました。



西志津地区社協会長 伊藤 泰彦さん

いざ再開!みんなが待ち望んだ3年ぶりのフェスタ

令和2・3年度と開催を見送ってきたフェスタですが、令和4年の秋、感染防止対策の徹底を踏まえ、3年ぶりとなるフェスタを開催。地区内すべての自治会に加え、商店や病院、薬局等から計57件もの協賛金が集まり、以前のフェスタと変わらず大勢の住民が参加してくれました。参加者が楽しんでいる様子に、地区社協福祉委員のみなさんは「胸が熱くなりました」と声を揃えます。

開催にあたっては、地区の全高齢者にフェスタの案内状と敬老会の記念品引換券を配布。イベント会場で記念品と引き換えることで顔を合わせる形にしたところ、当日は高齢者の54%もの参加があり、久しぶりに元気な姿を見ることができました。

その一方で来場しなかった高齢者については前年と同様に戸別訪問をして記念品を手渡すという活動を続けました。「フェスタに参加された方は元気な様子が見られて安心ですが、来られなかった方こそ見守りが重要だと思っています」と地区社協副会長の高木信安さんはいいます。



西志津地区社協副会長 高木 信安さん

新たなつながりを生むきっかけとなるフェスタ

今回のフェスタでは新たなつながりも生まれました。感染予防のため飲食の模擬店の出店を制限したため、それに代わるブースとして協力者を求めたところ、小学校の児童の父親の集まりで組織された父友会から協力が得られ、ゲームコーナーのブースを出展してもらうことができました。

また、野菜の販売ブースを設けたところ、多くの来場者から「是非うちで作っている野菜も何かに役立ててください」との声が挙がり、後日たくさんの野菜が集まりました。この野菜をどう活用すればいいか市社協に相談したところ、地区内にある子ども食堂に寄贈するという活動につながりました。これまで地区社協と関わりの薄かった子ども食堂への支援の必要性を認識するきっかけにもなり、今後地区社協として子ども食堂とどのように関わっていくかの検討も始まりました。

地区社協の福祉委員は高齢化してきており、後継者がいないことが課題ですが、こうした活動をきっかけに、次代の福祉委員として活動してもらえればという期待もあります。



西志津地区社協福祉委員のみなさん

みんなでわかちあえる地域

伊藤会長は「地区社協は地域で困っている人や地域の課題を拾い上げ、解決に向けた体制や活動を続けていく必要があります。そのためには色々な世代の方や団体と一緒に話し合い活動していくことが重要です。フェスタは地域がつながる貴重な機会でもあります」と話します。

長期にわたるコロナ禍で活動は制限されてきましたが、地域に必要なこと、望まれていることを地区社協のメンバーでしっかりと話し合い、地域住民の交流の場となる「ふれあいカフェひまわり」も新たに立ち上げました。

「西志津地区社協の特徴は地域のためにみなさんでよく話し合い、意見をぶつけ合うことです。みんなでわかちあえる土壌ができています」と佐倉市社協の杉山美枝子さん。その言葉のとおり、西志津地区はこれからも様々な世代や団体が交流し、わかちあえる地域として更に発展していくことでしょう。



西志津敬老ふれあいフェスタ協力者のみなさん

佐倉市社会福祉協議会 TEL 043-484-6197

誰もが住みよい地域をつくる存在 地域福祉コーディネーターモデル事業

少子高齢化、所得格差、人間関係の希薄化等々により、自らが抱える課題を解決できずに孤立してしまう方が年々増えています。さらにコロナ禍で人がふれあう機会が大きく制限されて、孤立化が助長されました。相談できる相手が居なかったり、どの誰に、何を、どの様に相談したらいいのか分からなかったり…孤独を感じ社会との接点を失いかけた方が、地域の中で“つながり”を持つことが重要であると痛感し、令和3年度から推進を始めた『ともに歩むふくしプラン4(第6次佐倉市地域福祉活動計画)』に地域福祉コーディネーターモデル設置事業を盛り込み、その役割を定義するとともに「志津南部圏域(志津南地区社協・西志津地区社協エリア)」をモデル圏域と定め

て、職員1名を専任しています。

様々な人と人をつなぎ、資源と資源をつないで解決に導き、誰もが住みよい地域をつくっていく存在です。

- ①活動団体の課題解決を行う
- ②個別の相談ごとを専門家につないだり地域の方の力を借りて解決する
- ③個人の課題を地域の方と共有し地域活動に反映し、相談者が社会参加できるようにする

この事を意識しながら日々アウトリーチをおこない、地域の中で住民が抱える課題の解決のために、①②③を止める事なく循環させることで、つながりのある暖かい地域をつくっていきます。



地域福祉コーディネーターの杉山さん(前列中央左)と地域共生推進班の皆さん

(令和4年10月取材)



流山市発!地区社協が運営する こども食堂 「みんなの食堂【あつまれ 西深井の森】」

新川北部地区社協が運営する「みんなの食堂【あつまれ西深井の森】(通称あつにし)」は、流山市で13番目となる子ども食堂です。毎月開催しているフードパントリー※イベントの会場となった西深井福祉会館へ伺い、同社協の高橋洋会長と矢口輝美副会長にこの取り組みについて取材しました。※食品を無料で提供する支援活動

地域の誰もが参加できる 「みんなの食堂」

『あつにし』がスタートしたのは2021年の5月。それまでの新川北部地区社協の事業は主に高齢者を対象とするものでしたが、高橋会長と矢口副会長は以前から、未来ある子どもたちのための事業をしたいと話していました。その熱意を形にした活動が『あつにし』です。

同社協の理事をはじめ、地域のみなさんや中高生ボランティア等、幅広い年代がこの活動に取り組んでいます。

市内に16箇所ある子ども食堂のなかで、地区社協の事業として行っているのは『あつにし』だけです。地区社協が運営することで、地域の民生委員児童委員や自治会役員、地域のボランティアが直接関わり、連携して様々な機関に迅速に繋ぐことができます。また、地域のみなさんから信頼されていることで協力もスムーズに得られます。

高橋会長は「子どものみならず、地域のみなさんのための『みんなの食堂』です。この活動を通して、地域の課題に対していろいろなことができるようになりました」と語ります。

『あつにし』で育まれる 支え合いの種

『あつにし』を立ち上げる際は、当時高校生だった矢口副会長のお子さんとその友人が名称を考え、ホームページを開設しました。今も情報発信を担うのは、中高生ボランティアです。機関紙『あつにしんぶん』の企画・取材・制作・発行まで行い、SNS等の更新も手がけています。

様々なイベントに出店する際の企画や運営も、子どもたちの学習支援として主催する「宿題を終わらせようプロジェクト」の指導係も、主体は中高生ボ

ランティア。これまでおよそ20～30人の学生が参加して、活動を推進してきました。「イベントの開催日が決まったら、グループLINEで参加者を募ります。来られる人は来てね、という声かけに毎回誰かが参加してくれます」と矢口副会長。

イベントに訪れていた小学生が、中学生になったら自分もやりたいと手を挙げてくれたり、『あつにし』で活動していた高校生が大学生になり、転居先の地域の子どもの食堂でボランティアをしたりと、この活動で育まれた支援の種が、未来に向けて豊かに育まれています。



民生委員児童委員や自治会役員からなる理事会では、活発な意見交換が行われています。



新川北部地区社会福祉協議会
会長 高橋 洋さん



新川北部地区社会福祉協議会
副会長 矢口 輝美さん



【チャリティーキッズカット】プロの美容師さんが1人500円でヘアカット。収益金は「あつにし」の活動に寄付されます。



【学習支援「宿題を終わらせようプロジェクト」】勉強を教えるというより「寄り添う」ことが大切。ひとりひとりの居場所づくりをしています。



【フードパントリーの様子】この日は近隣企業から寄付された洋服も配付しており、子ども達は楽しそうに選んでいました。

みんな笑顔に
なって帰ってくれる
のがうれしいです。
花屋さん

この活動を下の
世代に引き継いで
いきたいと思います。
矢口さん

地域の方と
交流できて
楽しいです。
福手さん



学生ボランティアのみなさん

いつも利用していて、
子どもたちも
楽しみにしています！



様々な人が触れ合う、 地域を見守る拠点として

『あつにし』がスタートして1年以上が過ぎ、矢口副会長は「ずっと今日まで走りながら、次々といろんな方にご協力いただいてやってこれたという感じです」と振り返ります。また、『あつにし』があることで、地域のみなさんが支援したいという気持ちを行動に移すことが出来るようになったとも感じています。

「チャリティーキッズカット」を主催してくれる美容室さん、お弁当やお米を寄付してくれる飲食店さんや農家さん等、たくさんの手が差し伸べられています。

地域の意識も少しずつ変わってきました。困っていても声をあげられない人に対して、周囲の誰かがちょっとした様子の変化に気づくことで、支援機関へその声を届けられるようになってきました。

「活動しながら私たちも学んでいます。『あつにし』が地域にとってなくてはならない活動になればと思っています」と高橋会長。矢口副会長も「何かあったときに、ここがあるよ、という場所にしていきたい」と想いを語ります。これからも『あつにし』は支援の輪を広げ、地域を見守り多世代が交流する拠点となることでしょう。

（令和4年8月取材）



つながりを絶やさず、地域でささえあう

我孫子市には、6つの地区社会福祉協議会と10のまちづくり協議会があります。天王台地区社会福祉協議会は、我孫子中学校区を活動エリアとして平成11年に設立されました。手賀沼にほど近い、緑豊かな環境にある「近隣センターこもれび」を活動拠点として、同地区の「こもれびまちづくり協議会」と「天王台北地区まちづくり協議会」との共催による様々な取り組みを行っています。

我孫子市天王台地区の概要、活動拠点

我孫子市の人口は、令和5年1月1日時点で130,964人（高齢化率30.8%）。豊かな自然に恵まれ、東京からアクセスが良く、都心のベッドタウンとして発展してきました。

天王台地区は市の中央部、手賀沼と利根川に挟まれたエリアに位置し、35,414人が暮らしています（高齢化率27.7%）。天王台地区社協の活動拠点となる「近隣センターこもれび」は、緑に囲まれた静かな環境にあります。建物の大きな窓から見える、柔らかな木漏れ日がふりそそぐ様子はまるで避暑地のようにあり、地域の幅広い世代が集う憩いの場となっています。



天王台地区社会福祉協議会 会長 細見 英樹 さん

ヘルスリズムスで頭と身体を活性化

近隣センターこもれびのホールからドンドコドン、ドンドコドン、と力強い太鼓の音が響いてきます。30名ほどの参加者が、太鼓を使った健康増進プログラム「ヘルスリズムス」を楽しんでいるのです。

「ヘルスリズムス」は参加者全員がいに腰掛け、足の間に太鼓をはさんで行います。講師が太鼓を叩きながら「今日は何月何日ですか？」「1+3+5-2は？」と、大きな声で出す問いかけに、参加者は日にちや計算の答えを太鼓を叩く回数で答えます。身体を動かしながら頭もフル回転するため認知症予防にはもってこいのプログラムですが、何よりも太鼓を叩くみなさんの楽しそうなこと！

毎月実施している「シニアいきいき講座」の「健康体操編」として平成20年から始まり、地区内にもうひとつある天王寺北近隣センターでの実施と合わせて、すでに70回以上も行っています。コロナ禍前までは座学と体操の両方を行い、当日参加も可能でしたが、現在は定員・予約制に変更し、感染防止対策を徹底して体操のみ行っています。



誰もが参加できるよう、バラエティ豊富な催しを企画

「シニアいきいき講座」には「歌声編」として歌の集いもあります。こちらはプロのソプラノ歌手とピアニストの指導のもと、多くの参加者が歌唱を楽しんでいます。

他にも、健康フェアや認知症サポーター養成講座、おしゃべりサロン、お楽しみ会等、バラエティに富んだ催しを2つの近隣センターで実施しています。

「健康体操編と歌声編は両方参加される方もいますが、どちらかひとつだけの方がほとんどです。それぞれ好みがあるので、参加者が偏らず、みなさんが楽しめるよういろいろ企画しています」と天王台地区社協会長の細見英樹さん。健康体操編も歌声編も女性が多いので、ぜひ男性同士の交流の場を作りたいと「男性のための料理教室」も10年前から開催しています。

コロナ禍でも「つながりを絶やさない」活動を継続

天王台地区社協では、広報紙「ゆうゆうだより」を年4回、10,300部発行しています。自治会の協力により地区内で戸別配布していますが、毎号、催しのお知らせや地域のニュース、ちょっとしたコラム等の記事が満載で、その誌面からは「こんなときだからこそ地域のつながりを絶やしてはならない」、という同社協の意欲が伝わってきます。

コロナ前の数倍の手間をかけ、あらゆる感染防止対策をとりながら実施しているイベントについても「たくさんの方に参加していただいて、元気に楽しく集っている姿を見るとやりがいを感じます」と地区社協事務局の中村智恵子さんは言います。細見さんも「今後も活動を継続していくため、できるだけ地域のニーズに対して細やかに応えていきたいと思っています。この活動を通じて私もみなさんから元気をもらっています!」と笑顔とともに話します。

お互いに支え合う地域へ

令和4年10月から、高齢者地域ささえあい活動として「ごみ出し支援事業」をスタートしました。これは、自治会等の協力のもと、地域の高齢者の困りごとを調べた結果、ごみ出しが困難との意見が最も多く寄せられたためです。

ごみ出しを依頼する人を利用会員、手伝う人を協力会員として登録し、1回につき250円のチケット制で実施します。ごみ出しが困難な高齢者はそもそも外出自体が困難なため、近隣センターで開催されるイベントに参加することも難しく、家で孤立しがちです。近所に住む元気な高齢者がちょっと手を貸すことで、単身高齢者の見守りにもつながっています。

誰もが、住み慣れた地域でお互いに支え合いながらずっと暮らしていくために、天王台地区社協の取り組みは一步一步着実に進んでいます。



天王台地区社会福祉協議会 事務局 中村 智恵子さん



我孫子市社会福祉協議会 TEL 04-7184-1539

制服リユース事業で安心して学習に取り組める環境を提供

我孫子市社会福祉協議会が行っている「制服バンク事業」は、市内に小中高校生がいる経済的な理由により制服等の購入が困難な世帯に対して、寄付を募って集めた制服等を無償でお譲りするというリユース事業です。

この事業を始めたきっかけは、市民の方々や学校、行政機関から寄せられた「制服が買えなくて困っている世帯がいるのですが、中古の制服は手に入りませんか?」という声でした。

近年、ひとり親世帯の増加、コロナ禍での収入減や失業などにより経済格差はさらに拡大しており、我孫子市でも経済的理由により制服等の購入が困難なご家庭が増えています。

そのようなご家庭の問題の一つでもクリアし、未来を担う子どもたちがストレスなく学習に取り組める環境を提供したいと考え、当事業を開始いたしました。

また、当事業を行うことでSDGsの理念に沿って

持続可能な地域社会を目指し、社会貢献活動や思いやりの気持ちを推進させることにもつながると考えています。

事業の開始にあたり、教育委員会や学校にも協力していただき、保管場所の確保やPR活動もスムーズに行うことができた。譲渡会も開催することができました。また、千葉県地域ぐるみ福祉振興基金の「ひまわり助成」を活用させていただき、移送車を用意しました。

今後は、この移送車を活用し、制服等の回収はもちろんのこと、制服を必要な家庭に届けるきめ細やかなサービスを行っていきたいと思っています。



我孫子市社協のみなさん
〔令和4年11月取材〕



地域をあげた避難訓練で自助・共助の意識を醸成

予測不能な災害に対し、地域の防災意識を高めておくことは喫緊の課題です。富津市の竹岡地区社会福祉協議会では、富津市、自治会、消防団などと協力し、「津波防災の日」に定められている11月5日に、地域住民を対象とした地震・津波避難訓練を実施しました。

富津市竹岡地区の概況

富津市全体の人口は令和4年4月現在で41,248人、高齢化率は38.9%です。「竹岡式ラーメン」発祥の地として知られる竹岡地区は東京湾に面した市内南西部に位置し、およそ600世帯、1,627名が暮らしており、高齢化率は47.3%となっています。

市と地域がタッグを組んで避難訓練を実施

海に面した竹岡地区は、津波や高潮への備えが必須です。今回の地震・津波避難訓練では、竹岡地区の住民の災害対応能力の向上を図るとともに、自助・共助意識を醸成することを目的として、市と竹岡地区がタッグを組んで実施されました。

訓練を行うに当たっては、事前に市や



避難誘導のようす

消防団とも協議を重ね、より実践的な訓練になるよう準備を進めました。

当日は、駿河湾を震源とする南海トラフ地震が発生し、震度6の揺れに見舞われたとの想定で行われました。11月5日の午前9時ちょうどに、市の防災行政無線や富津市安全安心メール等で「緊急地震速報」を放送・配信。市の全域を対象に、地震発生直後に机の下に隠れるなど身の安全を守る「シェイクアウト訓練」を1分間ほど行い、その後竹岡地区の訓練参加者が自宅から各所に設けられた避難場所へ移動しました。

令和元年15号台風での被災経験を教訓に

竹岡地区の住民が避難訓練に積極的に取り組む理由のひとつに、令和元年9月に千葉県を直撃した台風15号があります。市内でも強風を伴った大雨があり、2,000棟以上の家屋が被害を受け、倒木や土砂災害が172件発生。ライフラインの被害として停電が最大26,200軒（最長17日間）、断水が最大2,000戸（最長11日間）など、未曾有の被害は、次なる災害への備えと地域のつながりの重要性を深く認識する機会となりました。

大規模災害時、通信や交通の遮断が



富津市竹岡地区 区長会会長 斎藤 啓一さん

各所で発生し、被災状況を把握することもままなりません。竹岡地区区長会会長の斎藤啓一さんは地域の被災状況を一軒一軒まわって調べ、リスト化して富津市社協へ提出しました。

避難サポートは臨機応変に、身近にあるものを活用

避難訓練の後、参加者は旧竹岡小学校の体育館に集まり、実際の行動について良かった点や悪かった点などについて話し合う検討会が開かれました。検討会には予定を上回る約60人の参加者が集まり、活発な意見交換や、今後取り組むべき課題についての検討が行われました。

高台の神社へ避難した参加者からは「健康な私たちでも急な階段がきつい。高齢者が登れるとは思えない」「夜間や

雨天時などは足元が危険。濡れた落ち葉で滑りそう」など、様々な意見が寄せられました。

このうち、特に高齢者や体が不自由な方を早く安全に避難させるにはどうすれば良いのかということが大きなテーマになりました。住民が導き出した答えは、漁協で使用しているリヤカーに人を乗せて移動するということ。

斎藤さんは「身近にある使い慣れている用具を活用すれば、避難行動要支援者を迅速にサポートできます。いざという時にすぐ対応するためには日頃の訓練が大事だと思います」と話します。



高台に避難するようす

地区社協と自治会が連携して活動

斎藤さんが令和元年台風当時、正確かつ迅速に地域の被災状況を把握できたのは、普段から地域をよく知り、円滑なコミュニケーションがとれているからだと言えます。

富津市では地区社協と各自治会が連携して活動する形を取っているため、情報の共有や協力関係が非常にスムーズ

です。さまざまな支援活動やイベントの開催等についても、双方が協力して、地域に寄り添ったきめ細かな取り組みを行っています。

「今回防災訓練を行った竹岡地区では、令和元年の災害以降、市の防災安全課による出前講座をはじめ、市社協が運営した災害ボランティアセンターとの連携の在り方について等、防災に関する様々な研修を計画し実施しています。地区社協と自治会に行政も加わり、連携した活動をしている先駆的な地域です」と富津市社協事務局長の鈴木著代さんは言います。

これからの地域づくりに向けて

竹岡地区社協では、コロナ禍においても月に1～2回の見守り活動と、希望する単身高齢者への配食を続けています。コロナ禍以前は、年6回の配食のうち4回は会員が手作りしたお弁当を届けていました。

地域包括支援センターが地区内2か所の会場で「いきいき100歳体操」を実施しており、今後は体操終了後の時間を利用してサロン活動を行いたいと計画しています。



富津市社協事務局長 鈴木 著代さん



竹岡地区社会福祉協議会会長 浅倉 精一さん

竹岡地区社協会長の浅倉精一さんは、これからの地域づくりにおいて何よりも重要なのは「次世代の担い手を育てていくこと」だと言います。地域活動を継続していくうえでは、富津市に限らず後継者不足の問題が深刻です。「竹岡地区は自然豊かで、国指定の天然記念物や県指定の文化財などもある良いところ。過疎化が著しい地域近隣を含めて、もっとにぎやかにしていかなければと思います」と話します。

今回の避難訓練を通じて、あらためて地域のつながりを意識した竹岡地区。自助・共助の地域づくりに向けた活動が今後も展開されていくことでしょう。



高台に避難したあとのようす

富津市社会福祉協議会 TEL 0439-87-9611

災害を経験し、地域のさらなる連携強化に向けて

富津市社協では、令和元年の台風災害時の教訓を生かし、防災訓練を計画していくとともに、災害時における「公助」「互助」「自助」の在り方について行政・地域の皆様と連携して、多くの場で啓発活動を行っています。

行政や地区社協で開催される研修会等において、令和元年の台風15号・19号、10・25大雨時の被災状況と災害ボランティアセンターの活動、災害時の市社協の役割などを説明し、地域で助け合うことの重要性を伝えています。

災害時に地域で支え合い、より迅速な支援ができるよう、市社協では歳末たすけあい募金の配分金を利用して、地区社協単位に備蓄できる食料や物品等を購入し配布しています。また、災害時だけでなく、平時から地区社協の皆さんと積極的に連携し、多くの事業展開をしていけるよう日頃から情報共有を図っています。

今後も地域福祉推進の要となる地区社協の皆さんや行政関係部署と連携を強化しながら、社協の強みであるネットワークを活かし事業を推進していきます。



富津市社協のみなさん

〔令和4年11月取材〕

安心して戻れる場所でありたい！ 高齢世代から学生や子育て世代の声をくみ取る 地域福祉フォーラム「こうよう座談会」の取り組み

地域福祉フォーラムは様々な団体や個人が参加し、地域づくりのあり方や取り組み方を話し合い、協働を進める活動です。平成16年より千葉県地域福祉支援計画に基づき県内各地で取り組みが進められており、現在まで36市町村・350の小地域で地域の实情に応じた活動が展開されています。

本号では、富里市の浩養地区社会福祉協議会（以下、浩養地区社協）が中心となって立ち上げた、市内初となる小域地域福祉フォーラムの取り組みについて取材しました。

富里市浩養地区の概況

浩養地区は富里市の南部に位置し、富里名物のスイカをはじめ、たくさんの農産物を生産する緑豊かな農村地域です。

地区の人口は令和3年4月1日時点で1,764人、1世帯あたりの人員は2.26人、高齢化率は35.4%となっており、市全体の高齢化率28.6%を上回る状況です。

活動拠点は歴史ある 小学校の校舎の中

浩養地区社協の活動拠点は明治7年創立の富里市立浩養小学校の中にあります。この小学校には富里市立浩養幼稚園も併設されており、校舎1階にある「地域開放型会議室」を拠点に、児童や園児との交流を中心に様々な活動を展開しています。



世代を超えた交流 イベントを毎月開催

浩養地区社協では、高齢者を対象としたサロン活動をはじめ、園児や児童、障害者福祉施設の利用者が参加する落語鑑賞会、地域住民が一体となって行う敬老会等のイベントを盛んに行ってきました。浩養小の運動会や、障害者福祉施設の収穫祭に地域の高齢者が毎年参加することも恒例でした。

また、1学年1クラス、全校生徒数100人に満たない浩養小では、全学年が多目的室に集まって給食を食べる伝統がありますが、そこに地域の高齢者も加わり、小学生と一緒に同じ給食を食べ、賑やかなひとときを過ごすことが月に1度のお楽しみでした。

しかし、2020年から続くコロナ禍で状況は一変。感染リスクを回避するため、ほぼ全ての活動が中止を余儀なくされる事態に見舞われました。

コロナ禍でもつながり 続けるために

そんな中、集まって行う活動は全て中止となりましたが、今まで培ってきた地域のつながりを絶やさないためにも、コロナ禍でも何かできることはないかと模索し、当時はマスクの品薄状態が続いていた状況から、子どもたちへ手作りマスクをプレゼントする活動を行うことにしました。

マスク作りは、コロナ以前にサロン活動に参加していた高齢者にも声をかけて行い、様々なサイズやデザインのマスクを浩養小と浩養幼稚園の子どもや教職員へ贈ることができました。

現在は感染対策を講じながら、少しずつ活動を再開しており、令和4年4月にはイチゴ狩りを実施し、11月と12月には浩養小の子どもたちと交流するサロン活動を再開する予定です。



浩養地区社会福祉協議会長 佐々木 佳代さん

富里市初の小域地域 福祉フォーラムを立ち上げ

これまで世代間の交流に力を入れてきた浩養地区社協ですが、佐々木佳代会長をはじめ、地区社協のメンバーは、「これからは学生や子育て世代の声も反映させた地域づくりを進めていきたい」

との共通した思いを持っていました。

そうした折、第3次富里市地域福祉活動計画の策定にあたって市内全8地区で地域福祉座談会を開催することになり、浩養地区社協ではこれを好機と捉え、座談会のメンバーとして子育て世代や、福祉施設で働く若い世代などにも声をかけました。

期待どおりに活発な意見が出されたこ



富里市社会福祉協議会会長 宮川 朱美さん

の座談会をきっかけとして、地区社協、地域包括支援センターや民生委員も加わる形で実行委員会を組織し、令和3年11月、市内初となる小域地域福祉フォーラム「こうよう座談会」を立ち上げました。

「こうよう座談会」が 目指すもの

こうよう座談会では、「コロナ禍で希薄となった小学校・幼稚園とのつながりの回復」と「浩養の魅力を発信」を重点項目として、様々な世代の意見をくみ取っていきたくて考えています。

令和4年8月には、高校生以上の若者世代を対象とした1回目の座談会を予定。しかしコロナ禍により来夏へ延期となりました。今後、子育て世代、高齢世代を対象とした座談会も予定しています。

「活動を継続していくためには次の世代にバトンをつないでいく必要があります。次を担ってもらえる若い世代に地域の活動へ積極的に加わってもらうことが重要だと思っています」と、富里市社会福祉協議会会長であり浩養地区の民生委員を務める宮川朱美さんは話します。



実行委員会メンバーの1人が紙面作成やweb関連を担当。地域の魅力と浩養地区社協の活動を発信しています。



こうよう座談会HP



主任児童委員 本橋 幸子さん

魅力あるふるさと、 浩養地区を発信

活動の柱として、浩養地区の魅力を発信するための広報誌の発行、ガイドマップの発行、座談会の開催に取り組んでいます。ホームページとInstagramも開設しました。

「ここはあったかい地域なんです。ここで育った子どもたちが大人になり別の場所で暮らしたとしても、戻りたくなったりいつでも安心して戻れる場所でありたい。地域福祉フォーラムで地域の魅力や課題などを話し合い、より暮らしやすい浩養地区にしていきたいと思います」と主任児童委員の本橋幸子さん。この言葉には、メンバー全員の気持ちが集約されています。

「こうよう座談会」が発信する浩養地区の魅力が、この地区に暮らす皆さんにとってふるさとの良さを再認識する機会となるとともに、地域活動への関心が高まることに大きな期待が寄せられています。

富里市社会福祉協議会 TEL 0476-92-2451

社協に親しみやすさを！マスコットキャラクターとコラボした事業展開

「マスコットキャラクターを使ってもっと社協をPRしたい!」という職員の思いから、富里市社協は、令和4年6月～7月にかけて、広くマスコットキャラクターの公募を行いました。その結果、全国から166作品もの応募があり、選考を経て、最優秀賞作品の「さとしくん」が富里市社協のマスコットキャラクターとして誕生しました。



富里市社協マスコットキャラクター「さとしくん」

富里市社協は、今後様々な事業と「さとしくん」をコラボさせることで、多くの地域の方々に富里市社協の存在や活動を知ってもらい、これまで以上に活動の協力者を増やしていくことや、まだ支援の手が届いていない方とつながってきたいという狙いがあります。

令和3年9月には、富里市と連携をし、

フードロス対策や生活に困窮している方への食料支援を行うため、企業や家庭で不要になった食品や飲料を受け入れる「とみさとフードバンク」を開設し、富里市社協と富里市の各窓口には、食品回収ボックスが常設化されています。

例えば、こうした活動の周知に「さとしくん」を起用することで、地域の方々には親しみやすく身近な活動であると感じてもらい、結果的には寄付者の増加や緊急的に食料が必要な方へ食料が届きやすくなればと期待しています。

また、富里市名産のスイカをイメージした全職



員統一の真っ赤なポロシャツを着用して地域活動を行うなど、地域の方々に富里市社協という存在を身近に感じてもらえるよう工夫を凝らしています。

これまで様々な活動に取り組んできた富里市社協ですが、これからは「さとしくん」という強力なパートナーとタッグを組み、地域の皆さんのためにより一層邁進していきます。



富里市社協のみなさん（マスコットキャラクターに決定したさとしくんを囲んで）

（令和4年9月取材）



地域の課題を話し合い 実現を目指す「^{ちんかい}支え合い助け合い会議」の取り組み

匠瑳市の^{ちんかい}椿海地区社会福祉協議会は、地域住民の健康増進や交流をより活発にし、支え合える地域にしていくため、「椿海地区支え合い・助け合い会議」を開催して話し合いを重ねています。コロナ禍においても様々な対策を講じながら、高齢者の心身の健康を保ち社会参加を促すための取り組みを進めています。

■ 匠瑳市椿海地区の概要

椿海地区は、日本有数の植木・苗木の産地である匠瑳市の内陸部にあり、江戸時代中期に干拓された「椿の海」が地名の由来です。工場やスーパーはありませんが高齢化率30.6%、人口減少率は市内で最も低い地区です。

■ 高齢者の健康を維持し、支え合い助け合う地域へ

椿海地区社協の部会として設置している「椿海地区支え合い・助け合い会議（以下、ST会議）」は、市の「匠瑳市支え合い推進会議活動計画」に基づき、令和3年10月に立ち上げられました。



椿海地区社協会長（椿海地区ST会議議長）佐藤 栄子さん

ST会議では住民同士で話し合いを重ね、活動の三本柱として、1.健康づくり活動の推進、2.地区民が気軽に参加できる運動施設の開設、3.介護予防や防犯等の講習会を通じて地区民の交流を図る、という3つの目標を掲げて活動しています。

■ 徹底した感染対策のもと、いきいき百歳体操を継続

健康づくり活動の推進としての取り組みは2つ。その1つが「いきいき百歳体操の参加者拡大」で「いきいき椿海クラブ」の協力により実施しています。

このクラブは地区住民の「百歳体操を椿海地区でもやってほしい」との要望から有志により立ち上げ活動中でした。この事業により会員も増え、より充実した活動を継続しています。

体操の際に使用する補助用具は、感染予防のため、すべてを個人用に変更し、記名した袋に保管するようにしました。また、密を避けるために定員を決め、班ごとに実施する曜日を分け、検温、消毒、マスクとポリ手袋の装着など、可能な限りの感染防止対策に努めています。

■ 地域保全を兼ねた健康づくり「ウォーキングパトロール」

健康づくり活動の推進のもうひとつの取り組みは、ウォーキングパトロールです。パトロールは、日時もコースも決まりはなく、「ウォーキングパトロール」の名称が入ったオレンジの帽子をかぶり、各々が都合の良い時間に地区内をウォーキングする活動です。

参加者からは「自宅が小学校のそばなので下校時間に合わせ、散歩のついでにパトロールしています」「小学生から元気に挨拶をしてもらえるのがうれしいですね」という声があがっています。

現在、自治会の回覧と個別の声かけで募った約50名が活動しています。普段の散歩にプラスアルファの発想で、健康づくりと社会参加を両立したこの活動が椿海地域の安全を見守っています。



地域住民が気軽に 参加できる 運動施設の整備

ST会議の活動の2つ目の目標である、ターゲット・バードゴルフ場の開設準備は、現在進行中です。ターゲット・バードゴルフは、飛距離が短くコースの自由度も高いため、高齢者でも気軽に楽しめます。

ただ、練習場の整備や用具購入のための資金調達に苦心していました。そこで、千葉県社協が進める「地域福祉フォーラム助成事業」を申請し、助成を受けることができ、整備を進めています。百歳体操の参加者は女性が多いため、このターゲット・バードゴルフによって男性の参加者が増えることも期待しています。ST会議の顧問を務める大木三喜男さんは、「やりたかった取り組みが地域福祉フォーラム助成事業のおかげで実現でき感謝しています」と話します。



椿海地区ST会議 顧問 大木 三喜男さん

単身高齢者の実態調査 と見守り活動を実施

椿海地区社協では令和3年度から市より民生委員に提供される資料を基に80歳以上の単身高齢者世帯の実態調査を年に1回行っています。災害が発生した場合に備え、1人暮らしの高齢者の人数と住まいを把握しておくことは非常に重要です。

1軒1軒訪問調査をした結果、家族と同居しているケースもあって実態をつかむことができました。また、今後も継続して訪問を希望した約50人にはこれま

で5回訪問。その際には防災グッズや食品等を届け大変喜ばれています。

地域と関連を持ちつづ ける取り組みを継続

ST会議の様々な取り組みには多くの住民が参加しています。

椿海地区区長会の小堀稔さんは「こういった活動を行っていることは区長になるまで知りませんでした。地域のために少しでも力になれば幸いです」と話します。今後については「高齢者が自分の足で歩ける状態をできる限り維持できるよう、これからもサポートしていきたいです」と大木さん。椿海地区社協会長で、椿海地区ST会議議長でもある佐藤栄子さんも「この2年間の取り組みを通じて、コロナ禍でもやる気さえあればみなさんが協力してくれて、活動を続けることができると実感しました。」と話します。

椿海地区ST会議の取り組みが、高齢者の健康を支え、社会参加を促しています。



椿海地区区長会 小堀 稔さん



いいき百歳体操 参加者のみなさん

匝瑳市社会福祉協議会 TEL 0479-67-5200

地域でありのままの暮らしを、通い・訪問・泊りでお手伝い

匝瑳市社協では、平成19年4月から、介護保険サービスのひとつである小規模多機能型居宅介護事業所「紙ふうせん」(定員24人)を運営しています。自宅において可能な限り自立した日常生活を営むことができるよう、通い・訪問・宿泊を組み合わせ、24時間365日の形態で支援するサービスです。所在地は合併前の旧野栄町地区にあります。

事業開始のきっかけは、市高齢者支援課から働きかけがあり、市内に3か所程度の設置を目指しているのを、市社協において先行して実施してもらいたいというものでした。現在20人が利用していますが、利用対象者は要介護者だけでなく、介護予防として要支援者も含まれます。

事業開始以降、特に心掛けていることは、家庭的な環境づくりと地域住民との交流です。地域密着型サービスとして、コロナ禍であれば、地域の祭りのお神輿が来たり、近所の小学生が学校帰りに立ち寄ってくれたりしていました。ただ、コロナが流行ってからは、近所の方の訪問や、運営ボランティア、踊りやダンス、歌声などのボランティア活動も止まってしまい寂しい限りです。

そうした中、スタッフが工夫をこらし、できるだけ利用者からのリ

クエストに応じられるように配慮した、毎日手作りする食事はおいしいと好評です。輪投げやボウリングなどのゲームで盛り上がり、サクラやフジなどの季節には花見ドライブを企画したりしています。

利用者の皆さんがこれからも住み慣れた地域で、ありのままの暮らしを続けていけるよう、スタッフ一同工夫をこらしながら取り組んでいきます。



紙ふうせんのスタッフのみなさん

(令和4年12月取材)



地域の生活課題やニーズの解決に向けた協議体「よりどころみよし」の取り組み

南房総市社会福祉協議会では、平成28年から市内7地域に「ささえあいネットワーク南房総（協議体）」を設置し、助け合い・支えあいの地域づくりに取り組んでいます。三芳地区社会福祉協議会が中心となって運営している協議体「よりどころみよし」は、地域の生活課題やニーズの解決策を地域のみんなで検討する場であるとともに、見守りや高齢者の生活支援など、ニーズの解決に向けた活動を行っています。

三芳地区の概要

内房と外房にまたがり、南北に長い南房総市の人口は令和4年4月1日時点で35,968人、高齢化率は46.8%。市の中央に位置し、唯一海に面していないのが三芳地区です。田畑が広がり、のどかな里山の風景が広がる三芳地区は、水稲やみかん等の果実、花卉栽培が盛んで、新規就農者を対象とする市の就農支援施設もあります。高齢化率は40.1%と、他の地区に比べてやや低めです。

子どもも高齢者も一緒に楽しむのが「みよし流」

三芳地区では、コロナ以前には地区社会福祉協議会と連携して、幼稚園児と高齢者が一緒にお餅つきをするなど、



三芳地区社会福祉協議会副会長 伊勢田 照子さん

交流イベントを頻繁に実施していました。三芳地区社協副会長の伊勢田照子さんは「三芳地区は他の地区に比べて子どもの数が多いと思います。そんな地域性にあって、子どもも高齢者も地域の人々が一緒に食べたり笑ったりと賑やかな時間を楽しむことが『みよし流』だと活動を続けていました」と話します。

しかしコロナ禍に見舞われた令和2年には緊急事態宣言が発令され、サロン活動は当然休止する事態となりました。もちろん高齢者と子どもたちの集いも中止にするなど、これまでの様々な活動が突然できなくなってしまいました。

「継続は力なり」コロナ禍もラジオ体操は実施

コロナ前、三芳地区内では3カ所でラジオ体操を実施していました。これは、地域での「朝活」として、体操後に朝食を一緒に食べたり、持参した手作りのかきもちやクッキー等と飲み物で談笑したりと、健康づくりとともに地域の交流を深める機会でもありました。

コロナ禍においても、この朝のラジオ体操は月に1度から毎日の実施まで場所によって頻度は異なりますが、ずっと



サロンにおける輪投げゲームのようす

続けています。伊勢田さんは「正直、躊躇する気持ちはありましたが、止めるという考えはありませんでした。全員マスク装着の上、十分なソーシャルディスタンスを確保できる屋外で行うので、感染リスクは非常に低いだろうと。参加するしないは各々の判断に任せ、ラジオ体操だけは継続しました」と話します。

実施した結果、どの地区も欠席者は非常に少なく、コロナ前とほぼ同じ参加率で継続することが出来ました。



ラジオ体操のようす

集まらない時期は こちらから訪問

コロナ禍でも継続していたもうひとつの取り組みは友愛訪問です。民生委員が対象者を把握し、年3回、一人暮らしの高齢者と障がい者世帯をプレゼント持参で訪問しました。民生委員の田原澄江さんは「つながりを絶やさないことは、高齢者の健康のセーフティネットです」と言います。

三芳地区は昔から住民の結びつきが強い、とても穏やかな地域ですが、近年は単身高齢者の孤独死等、以前は都会で起こることだと思っていた事例が三芳地区でも発生するようになりました。

「今日はおそこのおばあちゃんが神社掃除に来ていないね、とか、まわりの人が小さな変化に気づくことが大事なのだと思います。そのためにはやはり日頃から地域がつながっていなければ」と話されていました。コロナ禍において見守りと声かけの強化を心がけています。



田原 澄江さん

待ち望んでいた サロン活動を再開

令和3年からは、みなさんから要望が多かったサロン活動を再開しました。地区内にある「みよし交流館」に集まり、健康のための講座や体操、レクリエーションを楽しんでいます。

サロン活動では「よりどころメンバー」から何かしらの差し入れがあるのもみよし流です。令和4年11月に開催したサロンでは、屋外のピザ釜で焼き上げた焼き芋を配布したり、和菓子店の店主でもある地区社協役員の網代裕さんが持参した「あんびん餅」をその場で焼いて、できたてを参加者に振る舞うことができました。心のこもった手作りの味をみんなで楽しめるひとときがやっと戻ってきたところですよ。



網代 裕さん

みんなで意見を 言い合える、おおらかで 風通しのいい関係

ラジオ体操や友愛訪問、サロン活動



ピザ釜で焼き芋を焼くようす

等、入念な感染防止対策をしながらの取り組みは、運営メンバーに熱意がなければ継続出来ません。そして、スタッフ同士でしっかり意見交換できる土壌があるからこそ実現出来たと言えるでしょう。

「私たちの『やりたい』という意見に対して、会長の真田隆久さんは決して否定しません。『やってみようさー』と、いつも前向きに応えてくれます」と伊勢田さん。真田会長をはじめ、よりどころメンバーの熱意とポジティブな姿勢が、助け合い・支えあいの地域づくりの原動力となっています。



三芳地区社協のみなさん

南房総市社会福祉協議会 TEL 0470-29-3729

地域みんなで取り組むささえあいのまちづくりへ

南房総市社会福祉協議会では、たすけあい・ささえあいの地域づくりを目指して、自分たちの住む地域の課題やニーズ（要望）を住民や多様な組織や団体などの枠組みを超えて、みんなで解決方法を考え、話し合う場として「ささえあいネットワーク南房総（協議体）」を市内7地域（旧中学校区単位）に設置しています。これは、南房総市が推進してきた、地域にある課題を協議・検討する「地域福祉フォーラム」の考え方を活かした取り組みです。

これら7地域において、地域に合わせた支え合い活動が進められるよう、市社協職員が生活支援コーディネーターとして活動しています。

主な取り組みとして、①地域みんなでささえあう身近な場所での居場所づくり、②移動や外出を地域みんなでささえあう仕組み

づくり、③地域の誰かがみんなで見守り、ささえあう仕組みづくり、④地域の課題を地域みんなで解決できる仕組みづくり、をそれぞれの地域性に合わせて地域住民が主体となって取り組んでいます。

コロナ禍となり、これまでのような活動が難しくなりましたが、地域で今起きている課題に目を向け取り組んでいます。例えば、多人数で集まることのできなくなったサロンでは、小規模にする一方で回数を増やしたり、サロンが実施できない場合は、感染対策をしながら顔と顔を合わせた見守り活動をしています。また、サロンの場に移動販売を活用し、買い物支援など新たな取り組みも進めています。

感染を恐れ、人と人とのつながる機会が減っている今、工夫して地域のつながりを作っていくことによって新たな発見や課題

も見えてきています。コロナ禍でも地域福祉活動は必要であり、今の時代に合ったたすけあい・ささえあいの地域づくりを地域の方々と共に進めていきます。



南房総市社協のみなさん

（令和4年11月取材）



コロナ禍でも工夫してサロン活動を継続

一宮町の船頭給、宮原、新地の3地区からなる北部地区社会福祉協議会は、コロナ禍においても積極的にサロン活動に取り組んでいます。地域に住むの高齢者のみなさんは、船頭給公民館で毎月第1月曜日に行われる「こじゃ処」～健康体操とお茶のみサロン～と、第3月曜日に行われる趣味の会に毎回楽しく参加しています。ウイルス感染と高齢者の孤立という課題に対し、感染対策に配慮しながらサロン活動を継続しています。

一宮町北部地区の概要

一宮町は九十九里浜の南端に位置し、東京2020オリンピック・パラリンピックでサーフィン競技が行われた釣ヶ崎海岸を有しています。町中にはサーフショップやリゾートをイメージさせるお洒落なカフェなども多数あるため、若者が多いような印象を受けますが、令和4年4月1日時点で町全体の高齢化率は、総人口12,386人に対して32%。1,764人が暮らす北部地区は、高齢化率36%とさらに高い地域です。

コロナ禍でも活動を続ける理由

「みんなに会いたい。またみんなで集まって話がしたい」。不要不急の外出は



控えなければならないコロナ禍において、北部地区社協会長の田中登さんへ届いた地域の高齢者のみなさんの声です。その声は、みんながサロンの開催をどれほど楽しみにしているかを示す証でした。人との接触を出来るだけ避けなければならないため、見守り等の訪問活動も制限されているからこそ、会いたいという気持ちは切実です。

「コロナが蔓延した時はもうどうしようかと思いました。でもあきらめず、何とかやれる方法を模索し、感染防止対策を徹底することでこれまで進めてきました」と田中さん。

状況を判断して臨機応変に対応

サロン活動は参加者の検温に始まり、マスクの装着と手指の消毒、3密の回避、十分な換気を徹底して行います。毎月サロンの開催予定を回覧でお知らせしていますが、緊急事態宣言が発令されたり、感染者数が急増してきた場合は中止としました。感染が下火になったタイミングで再開、そしてまた数回続けては中止と、コロナといたちごっこをするようにこの2年間繰り返してきました。田中さんは「学校や市中で感染が急激に広



北部地区社協会長・地区民生委員 田中 登さん

がった時には直前に取りやめたこともありました。とにかくその時の状況を見ながら臨機応変に対応してきました」と話します。

出欠確認は見守りにもつながる

サロンは参加者の出欠確認からスタート。田中さんが参加者の名前を一人ずつ読み上げ、参加者は「はい!」と元気よく返事をします。「脳トレ」も兼ねたこの出欠確認では、さきほど検温した体温を各自答えることに。たまたま「36.2度」という人が連続すると、「忘れたから前の人をなぞってるんじゃないだろうね?」と田中さん。参加者から一斉に笑いが起きます。

いつも参加している人が欠席してい

る場合、「〇〇さんは〇〇のため欠席です」など、ご近所の方から情報提供があったりします。参加してもしなくてもご近所でおたがいに見守りができていることがわかります。

町の保健師から新型コロナにおける屋外でのマスクの着用の取り扱いなどについて説明があった後、健康体操に移ります。保健センターから派遣された介護予防推進員の方が中心となり、ソーシャルディスタンスを十分に確保して行います。一宮町名物の「サーフィン音頭」も楽しく踊ります。

積極的な広報で参加者にも地域にも伝える

サロン参加者からは「家で運動するの億劫だけど、ここに来ればやる気になる」「体操を覚えて家でもやっている」等様々な感想が聞かれましたが、みなさん共通しているのは「体操後は身体がスッキリする」ということ。健康体操の後はお茶とお菓子を味わいながら、ひとときのおしゃべりタイム。他愛もない会話にあちこちで笑い声が絶えません。

このサロンは、田中さんが会長に就任した翌年度の平成26年8月からスター

トしました。サロンの終了後には、活動の様子が見える写真や記事を掲載した報告書もすぐに作成し、各地区で回覧してもらいます。続けること丸8年、その報告書を読み返すことで参加者は楽しかったことを思い返し、一方で参加できなかった方には地区社協の活動を知ってもらう機会になるとともに、次のサロンへの呼び水にもなっています。

孤立を防ぎ、交流を深めるために

同じ北部地区社協の宮原地区においても、毎月1回サロン活動が行われています。企画・開催するのは民生委員の高梨まゆみさん。「宮原地区は当初20名ほどの参加がありましたが、介護施設に入所したり、歩行困難になってしまったりと、高齢化とともに参加者が減少してしまい、今は6、7人です」と話します。参加者全員が女性なので、歌を歌ったり、折り紙や手芸、簡単なクイズや言葉遊びゲーム等を楽しんでいます。

「宮原地区は女性がメインなので、男性にも気軽に参加してもらえる会にしていきたいです」と高梨さん。

幅広い世代を対象に 他組織との共同活動を目指す

コロナ禍が続く中、このサロンに来てその日初めて人と会話をしたという単身世帯の高齢者もいます。移住・定住を促進している一宮町には、若い世代のみならず、リタイア後に夫婦で県外から移住してくるケースもあります。配偶者に先



宮原地区民生委員 高梨 まゆみさん

立たれ、親戚や知人のいない土地で独り暮らし高齢者にとって、このサロンは地域の住民同士が交流を深める貴重な機会になっています。

今後もっと参加者を増やしていきたいという考えは、田中さんも高梨さんも共通です。田中さんは「今は高齢者が対象ですが、青少年相談員や子ども会等と一緒に、地域が一体となって楽しめる活動に取り組んでいきたい」と話します。

すでに、子どもたちを招いて初春に獅子舞を披露したり、アルパという弦楽器の奏者による演奏会を開催しています。「無理をしないで地道に工夫をしながら続けていきます」という田中さんの言葉どおり、長年積み重ねてきた活動が、これから幅広い世代の交流と地域の活性につながっていくことでしょう。



一宮町社会福祉協議会 TEL 0475-42-3424

生活支援コーディネーターによる新たな支え合いの仕組みづくり

一宮町社協として生活支援コーディネーター（生活支援体制整備事業）の業務を開始して、早6年が経ちました。町社協には1層（町全体が対象）と2層（日常生活圏が対象）の生活支援コーディネーターが配置されており、このうち2層のコーディネーターが町内に住む75歳以上の高齢者宅を訪問し、健康状態や生活上の困りごと、ボランティア活動への興味、緊急連絡先等の聞き取り調査を実施しています。

聞き取った情報は地域包括支援センター（以下、地域包括）と共有し、支援が必要と思われる方の早期発見や、相談が寄せられた際の基礎情報として活用しており、支援に役立つ聞き取り調査の実施に努めています。

一宮町には、町で生まれ育った方に加え、かつて「東の大磯」と称された自然豊かな一宮町を終の棲家と定めて転居してくる方も多くいます。両者の生活スタイルには違いもありニーズも様々ですが、共通するニーズとして挙げられるのは買い物に行くための移動手段の不足です。

町社協では、その解決方法のひとつとして、ニーズのある地域と民間企業による移動販売をつなぐ支援や、希望者をスーパーまでお連れする買い物支援を実施しています。まだモデル地区限定の実験段階ではありますが、引き続き実施していく予定です。

現在ある資源を活用するためのコーディネートはもちろん、不足している資源を補うための新たな支え合いの体制づくりをどう進めるかという課題に対し、私たち町社協では、地域包括との連携も強めながら、一宮町で暮らしていてよかったと思えるまちづくりのためにこれからも試行錯誤していきます。



一宮町社協のみなさん

（令和4年11月取材）

地域の誰もが自由に使える 常設の交流拠点「交流サロンかぐや」

御宿町社会福祉協議会は、令和3年より地域住民が交流できる常設のサロンとして「交流サロンかぐや」を主催しています。地域の誰もが自由に使える交流サロンとして、平日の10時から15時まで、曜日ごとに御宿町社協を含む4団体が運営しています。地域おこし協力隊やボランティア等との協働により御宿町の幅広い世代に活用され、多世代交流や子育て支援の拠点となっています。

御宿町の概要

房総半島の南東部に位置し、童謡「月の沙漠」発祥の地としても知られる御宿町は、令和4年12月末時点で7,114人が暮らす、美しい海辺の町です。高齢化率は県内で最も高い51.9%となっています。

子ども服のリサイクルを きっかけにスタート

商店と住宅が並び通り沿いの建物から、にぎやかな笑い声が聞こえてきます。「交流サロンかぐや」に乳幼児を連れたママたちが集まり、ワークショップや子ども服古着の交換会等、様々な活動を行っているのです。

この活動のきっかけは、女兒を出産したママの「誰か、女の子の服持ってな



い?」のひと言でした。子ども服はすぐにサイズが合わなくなるため、子育て中の家庭にはまだ十分着られる服がたくさんあるはず。そのおさがりを活用したいと、ママ友数名で子ども服の交換会を企画しました。宿泊施設の敷地を借りて、子ども服交換会「アミーゴマルシェ」を開催したところ、地元のママたちに大好評。「不用となってしまった服が必要とする人に譲られ喜んでもらえる、そんな活動をもっと続けていきたいと思いました」と吉原春香さん。

サロン活動は無理せず、 楽しく!

早速、定期的に開催できる場所を探しましたが、コロナ禍真っ只中の当時、公共施設はどこも制約が多く難しい状況でした。そんな時に「交流サロンかぐや」の存在を知り、令和4年7月から「かぐやdeアミーゴ」と名付けた子育てママグループの活動がスタートしました。

「この場所の存在は以前から知っていましたが、公の組織や団体しか使えないと思っていました。御宿町社協さんから『好きなように使っていいよ』と言っていて、本当にありがたかったです。」という関宏美さんの言葉は、メンバー全



関 宏美さん

員の気持ちです。

アミーゴのメンバーはおおよそ9名。「おおよそ」と付くのは、登録者は9名ながら誰でも参加可能であり、通常の組織としての規約や役割分担が一切ないグループだから。話し合いの中でアイデアを出し合い、それぞれができることを担って、楽しみながら取り組んでいます。

ひとりじゃない、 みんなで子育て

御宿町には認定こども園がひとつもなく、子どもたちの大半は同じこども園に通うため、保護者同士もほとんどが顔見知りです。しかしコロナ禍でステイホームの日々が続いていた当時、ママ達は大きな不安と孤立感を抱えていました。「通園も外出もなくなったあの頃

は、本当に辛かった。孤独を痛感しました」と関さん。アミーゴのメンバーも「ここに来てうれしいことは、なんといってもみんなに会って話ができること!」と口を揃えます。メンバーではないけれど、ふらりと訪れておしゃべりを楽しむママも多く、もちろんほとんどが子連れなので、それはそれは賑やかです。子どもと一緒に気兼ねなく集い、育児の悩みや喜びに共感できるこの場所は、地域のママたちのオアシスになっています。

町を動かした環境保全の取り組み

「交流サロンかぐや」は元々店舗兼住居の建物なので、キッチンやお風呂、お手洗い、和室などがあり、どこも自由に使用できます。子ども連れにはうってつけの環境に恵まれ、アミーゴの活動の幅が広がりました。発端となった子ども服交換会はもちろん、親子で季節の飾りを手作りしたり、ビーチクリーン活動や、小学生から高校生までを対象にしたプログラミング教室などのワークショップも開催しています。

なかでも「エコ石鹸の使いこなし方」



をテーマにしたワークショップは盛況でした。御宿のきれいな海を守っていくことは、町民共通の願いです。環境負荷を減らすため、合成洗剤を避け、廃食用油をリサイクルしたエコ石鹸を使おうというこの取り組みは話題となり、御宿町長の耳にも届きました。後日、町役場でアミーゴメンバーが講師とともにエコ石鹸のプレゼンテーションを行い、その結果、町の公共施設の手洗いに設置する石鹸について、エコ石鹸の使用を検討して頂ける事となりました。

三世代の女性が生き活きと輝ける場所

「交流サロンかぐや」はアミーゴ以外にも、「かぐやメイト」と「商工会女性部」の2団体が利用しています。サロン立ち上げ時からボランティアとして参加していたかぐやメイトは、アミーゴメンバーの母親から祖母にあたる世代が中心です。町のイベントや小学校等で「房州御宿音頭」の踊りを指導する他、様々な創作活動をしています。

一方の商工会女性部は、アミーゴとかぐやメイトの中間世代。お雛様や動物、縁起物などの人形を紐で繋いで飾る御宿伝統のひな飾り「つるし雛」の手づくり体験を行っています。

御宿町社協事務局長の貝塚克之さんは「アミーゴのみなさんの活動と他のグループの活動が刺激しあって、よい相乗効果が生まれています」と話します。

アミーゴメンバーにとっても、元気に活動する先輩方が身近にいる環境は頼



吉原 春香さん

もしい限りです。「コロナが収束したら調理教室をやりたい。味噌作りや梅干し作りなど郷土の味を、かぐやメイトのみなさんに教えていただきたいです」という声や、「子どもが成長して世代交代しても、アミーゴの活動はずっと継承していくて欲しいです。私たちもゆくゆくはかぐやメイトになって、同じメンバーでこのサロンに集まっているかも」と口々に語るアミーゴメンバーには、これからもやってみたい活動のアイデアがたくさんあります。三世代の女性の活動が町に活気をもたらしています。



御宿町社会福祉協議会 TEL 0470-68-6725

地域によって異なる困りごとを「お手伝いボランティア」が解決へ

御宿町は小さな町ですが、生活の中の困りごとは地域によって異なります。

地区社協より小さな自治会単位で困りごとを解決しようという「お手伝いボランティア」の動きが始まりました。

高齢化率が高い御宿町の中でも、特に高齢化率の高い自治会での住民の困りごとは「ゴミ出し」でした。ゴミの集積場までゴミを持って行けない方へのボランティアによるゴミ出し支援の開始に向けて地域での話し合いは始まりました。利用者を把握する民生委員と、実際にゴミ出しを行うボランティア、自治会の役員が地域の交流拠点「ふれあいの家」に集まり、会議を重ね、区域内で生活する住民の皆さんが実際に必要とする方法で、支援に向かう仕組みができあがりました。

大切にすることは、支援を受ける方を「高齢者だから」「障害者だから」という理由ではなく、「実際にゴミ集積場までゴミを持って行けない方」としたことです。

今回は、ひとつの地域に合わせた「お手伝いボランティア」ですが、今後はそれぞれの地域に合わせた「お手伝いボランティア」の活動を目指していきます。

今回の記事で紹介された、もうひとつの交流拠点「交流サロンかぐや」では、子育て中のママが中心になって、子育て世代の皆さんが生き生きと活動できるよう、町内全域に向けた活動を展開しています。

地域の課題に取り組むグループと、世代の課題に取り組むグループ。町内に2つある交流拠点を基盤に、それぞれのグループが特長を生かした取組みで活躍しています。



御宿町社協のみなさん

(令和4年11月取材)

令和5年度

スケールメリットを活かした割安な保険料で
充実補償をご提供します!



ホームページでも内容を紹介しています
<https://www.fukushihoken.co.jp>



社会福祉施設総合損害補償

しせつの損害補償

◆加入対象は、社協の会員である社会福祉法人等が運営する社会福祉施設です。

プラン1 施設業務の補償

(賠償責任保険、医師賠償責任保険、看護職賠償責任保険、サイバー保険、
動産総合保険、費用・利益保険)

① 基本補償(賠償・見舞費用)

保険期間1年

▶保険金額		基本補償(A型)	見舞費用付補償(B型)
賠償事故に対応	身体賠償(1名・1事故)	2億円・10億円	2億円・10億円
	財物賠償(1事故)	2,000万円	2,000万円
	受託・管理財物賠償(期間中)	200万円	200万円
	うち現金支払限度額(期間中)	20万円	20万円
	人格権侵害(期間中)	1,000万円	1,000万円
	身体・財物の損壊を伴わない経済的損失(期間中)	1,000万円	1,000万円
	徘徊時賠償(期間中)	2,000万円	2,000万円
お見舞い等の各種費用	事故対応特別費用(期間中)	500万円	500万円
	被害者対応費用(1名につき)	1事故10万円限度	1事故10万円限度
	傷害見舞費用		死亡時 100万円 入院時 1.5~7万円 通院時 1~3.5万円

- オプション1 ●訪問・相談等サービス補償
- オプション2 ●施設の医療事故補償
 - ・医務室の医療事故補償
 - ・看護職の賠償責任補償
- オプション3 ●施設の借用不動産賠償事故補償
- オプション4 ●クレーム対応サポート補償
- オプション5 ●施設の感染症対応費用補償
休業補償から各種対応費用までワイドな安心
 - ①休業や縮小営業による収益減少はもちろん、収益減少を防止・軽減するための人件費なども補償
 - ②消毒・清掃費用や自主的なPCR検査費用など、かかった費用を幅広く補償
 - ③感染症対応特別費用で定額20万円を早期に受取り

② 個人情報漏えい対応補償 ③ 施設の什器・備品損害補償

プラン2 施設利用者の補償

(普通傷害保険)

- ① 入所型施設利用者の傷害事故補償
- ② 通所型施設利用者の傷害事故補償
- ③ 施設送迎車搭乗中の傷害事故補償



プラン3 職員等の補償

(労働災害総合保険、普通傷害保険、約定履行費用保険、雇用慣行賠償責任保険)

- ① 職員の労災上乗せ補償
使用者賠償責任補償
- ② 役員・職員の傷害事故補償
- ③ 役員・職員の感染症罹患事故補償
- ④ 雇用慣行賠償補償



プラン4 法人役員等の補償

(役員賠償責任保険)

社会福祉法人役員等の賠償責任補償

● このご案内は概要を説明したものです。詳細は「しせつの損害補償」手引またはホームページをご参照ください。●

団体契約者

社会福祉法人 全国社会福祉協議会

〈引受幹事
保険会社〉

損害保険ジャパン株式会社 医療・福祉開発部 第二課

TEL: 03(3349)5137

受付時間: 平日の9:00~17:00(土日・祝日、年末年始を除きます。)

取扱代理店

株式会社 福祉保険サービス

〒100-0013 東京都千代田区霞が関3丁目3番2号 新霞が関ビル17F

TEL: 03(3581)4667

受付時間: 平日の9:30~17:30(土日・祝日、年末年始を除きます。)

令和5年度

<https://www.fukushihoken.co.jp>

ふくしの保険

検索

日本国内でのボランティア活動中のケガや賠償責任を補償

ボランティア活動保険



保険金額・年間保険料（1名あたり） 団体割引20%適用済／過去の損害率による割増適用

プラン		基本プラン	天災・地震補償プラン	特定感染症重点プラン
保険金の種類				
ケガの補償	死亡保険金	1,040万円		
	後遺障害保険金	1,040万円（限度額）		
	入院保険金日額	6,500円		
	手術保険金	入院中の手術	65,000円	
		外来の手術	32,500円	
	通院保険金日額		4,000円	
	特定感染症		補償開始日から10日以内は補償対象外(*)	初日から補償
賠償責任の補償	地震・噴火・津波による死傷		×	○
	賠償責任保険金（対人・対物共通）		5億円（限度額）	
年間保険料		350円	500円	550円

商品パンフレットは
コチラから



（ふくしの保険
ホームページ）

*3月末までに契約手続きが完了し、前年度から継続して契約される場合は初日から補償します。

<重要>

- ◆ 基本プランでは地震・噴火・津波に起因する死傷は補償されません。
- ◆ 特定感染症重点プランでは中途加入の場合でも補償開始日より特定感染症が補償対象となります。
- ◆ 年度途中でご加入される場合も上記の保険料となります。
- ◆ 中途脱退による保険料の返金はありません。
- ◆ 途中でボランティアの入替や、ご加入プランの変更はできません。
- ◆ ご加入は、お1人につきいずれかのプラン1口のみとなります。

ボランティア行事用保険（傷害保険、国内旅行傷害保険特約付傷害保険、賠償責任保険）

送迎サービス補償（傷害保険）

福祉サービス総合補償（傷害保険、賠償責任保険、約定履行費用保険（オプション））

● このご案内は概要を説明したものです。詳細は、「ボランティア活動保険パンフレット」にてご確認ください。●

団体契約者 社会福祉法人 全国社会福祉協議会

〈引受幹事〉 損害保険ジャパン株式会社 医療・福祉開発部 第二課

TEL: 03 (3349) 5137

受付時間：平日の9:00～17:00（土日・祝日、年末年始を除きます。）

この保険は、全国社会福祉協議会が損害保険会社と一括して締結する団体契約です。

取扱代理店 株式会社 福祉保険サービス

〒100-0013 東京都千代田区霞が関3丁目3番2号 新霞が関ビル17F

TEL: 03 (3581) 4667

受付時間：平日の9:30～17:30（土日・祝日、年末年始を除きます。）

ふれあいネットワーク



社会福祉
法人

千葉県社会福祉協議会

私のまちの福祉活動カタログ vol.15

■企画・編集／社会福祉法人 千葉県社会福祉協議会
〒260-8508 千葉市中央区千葉港4-3 ☎043-245-1102
■発行／令和5年3月



この冊子の発行には、
一部共同募金の配分金を
充当しています。

